1870〜90年代北満洲における辺境貿易と漢民族の移住

荒武達朗（あらたけたつろう）

はじめに
Ⅰ　19世紀後半北満州の変容
Ⅱ　ロシア極東の後背地としての北満
むすびにかえて――19世紀後半北満洲の開発――

はじめに

中国東北地方（本稿では歴史的用語として満洲と標記）の人口は現在約１億人を数える(注1)。17世紀半ばの明清交替の際の遼東での戦乱やその後の人口の関内への移動によって，ほぼ空白地と化していたことを考えれば，この約300年の人口増加は急激であった。先学の研究(注2)に拠ればこの増加も19世紀半ばまでは緩慢であった。乾隆５年（1740年）に本格化した清朝の封禁政策（漢民族の入域を制限する政策）は19世紀の前半に形骸化し，その後に当地に無数の移民が流入し始めたという。表１は1850―1930年の人口増加の推計である。もとより系統的な人口調査は満洲国の成立を待たねばならず，それすらも毎年流入してくる全ての人口を把握できていたとは言えない。それ以前の統計はなおさら不完全だが，おおよその傾向をつかむ事は出来る。Chen（1970），趙・謝（1988），Eckstein et al.（1974）の３つの推計に共通するのは，19〜20世紀の転換点でのいわゆる「猛増」である。これが東清（中東）鉄道の建設によるものであることに疑いはない。鉄道は人と物資の移動を容易にし，満洲なかんずく北満洲（以下北満と標記，南満も同様）を世界経済に連結させた。北満は小麦・大豆の生産地として急成長し移民の流入が奔流化，俗に中国語で“十年一倍”（10年で２倍になる）と称される人口の激増を経験するのである。ところでそれ以前に目を移せば，この激増の巨大さにくらべれば小ささが目立つものの，無視できない高い増加率を示しており，1900年に先立つ40〜50年で人口はほぼ２倍［趙・謝 1988；Eckstein et al. 1974］から４倍［Chen 1970］に増加していることがわかる。

本稿が明らかにするのは，19世紀後半の人口増加，いわば激増に先立つ胎動の背景である。先行研究に拠れば，1861年の営口開埠による満洲の開放，封禁から土地払い下げ（丈放）・移民開墾奨励への転換の２つが人口増加の原因として考えられている(注3)。だが前者についてみれば，19世紀末まで営口の貿易額は緩慢に増加するにとどまっている［小瀬 1989］。内陸交通の未発達による経済圏の分断という条件下では［田中 1930, 186-189］，開港の影響は遼河流域から南満にかけてを除けば限定的であったと考えてよい。にもかかわらずこの時期植民の前線はすでに北満へと達しており［入江 1937，附図］，営口

『アジア経済』XLVI-8（2005. 8）

表1　満洲人口の推移（1851～1930年）
（単位：人）

年	Chen試算	Eckstein試算	趙・謝試算
1851	3,200,000		
1860		3,283,000	3,696,430
1870			3,914,799
1872		4,454,000	
1873	3,950,000		
1880			5,259,482
1887	5,720,000	5,150,000	
1890			6,173,620
1898		6,943,000	7,605,588
1900	12,390,000		
1908	17,340,000	17,055,000	
1909	17,780,000		
1910	18,210,000	17,942,000	
1911	18,640,000		19,964,226
1912	19,080,000		21,694,193
1913	19,530,000		
1914	19,990,000	19,652,000	
1915	20,460,000		
1916	20,960,000		
1917	21,470,000		
1918	22,010,000		
1919	22,590,000		23,415,883
1920	23,160,000		
1921	23,740,000		
1922	24,300,000		
1923	24,900,000		
1924	25,530,000		
1925	26,170,000		25,090,452
1926	26,840,000		
1927	27,710,000		
1928	28,760,000		27,047,139
1929	29,730,000		
1930	30,390,000	31,300,000	

（出所）　Chen（1970, 152-153），Eckstein et al.（1974, 245），趙・謝（1988, 452-471, 510-511）
（注）　遼寧・吉林・黒龍江三省の合計である。

開埠の影響を高く評価することは難しい。一方後者についていえば，1860年封禁政策は部分的に解除に転じた［楊 1991, 200-202］。道光年間まで民地（清朝の八旗制度［満洲・蒙古・漢軍］に属さない民人の土地）は吉林南部に限定され，それより北の吉林・黒龍江では旗地の比重が高かった。旗地は原則的には八旗所属の旗人以外による所有が認められない土地であったが，この後は従来通り天然資源の保護ははかられたものの，官荘などの開放すなわち「官荒放墾」が行われた［衣 1993, 301-310］。その主なものを省別にあげれば，遼寧省では同治年間，1860年以降朝鮮国境付近，蒙古方面，盛京囲場が旗人以外に開放された。吉林省でもほぼ同時期に西部，伊通河流域，北部が開放された。黒龍江省では咸豊４年（1854）年に呼蘭河流域，光緒10（1884）年に北部の通肯地区がそれぞれ開放され，清末の光緒30年（1904年）以降には省の全域に及んだ［入江 1937，23-36］。林（2001）は，この漢人の積極的導入への転換をロシアの満洲進出に備えた「移民実辺」（移民をもって辺境を充実させる）政策の開始と評価し，また煩雑化する地方行政に対応するため，官有地の払い下げ（丈放）によって地方行政経費を賄おうとした側面も否定できないという。

この丈放の進展と移民招致・開墾奨励に人口増加の理由を求めるのは，時期的にも一致しており妥当かもしれない。だがこれらが互いに時期を同じくして展開されたとは限らない。いくつか事例をあげると，黒龍江省西部，内モンゴルにほど近い景星県は光緒34年（1908年）に土地が開放され民国４年（1915年）に県治設局が創設されたが，移民は遅々として進まなかった［山田 1926，下巻326］。反対に吉林省東部の磐石，黒龍江省東部の烏球県一面坡，中部の綏化と呼蘭では移民の私墾が先行し，それより遅れて行政機関が設置されている［山田 1926，下巻78-79, 164, 331］。このように払下開始をただちに移民の流入と見なすことが出来ない場合もある。守田（1906，下巻第八編）は北満だけに限定された調査ではあるが，聞取りによってその地域に大

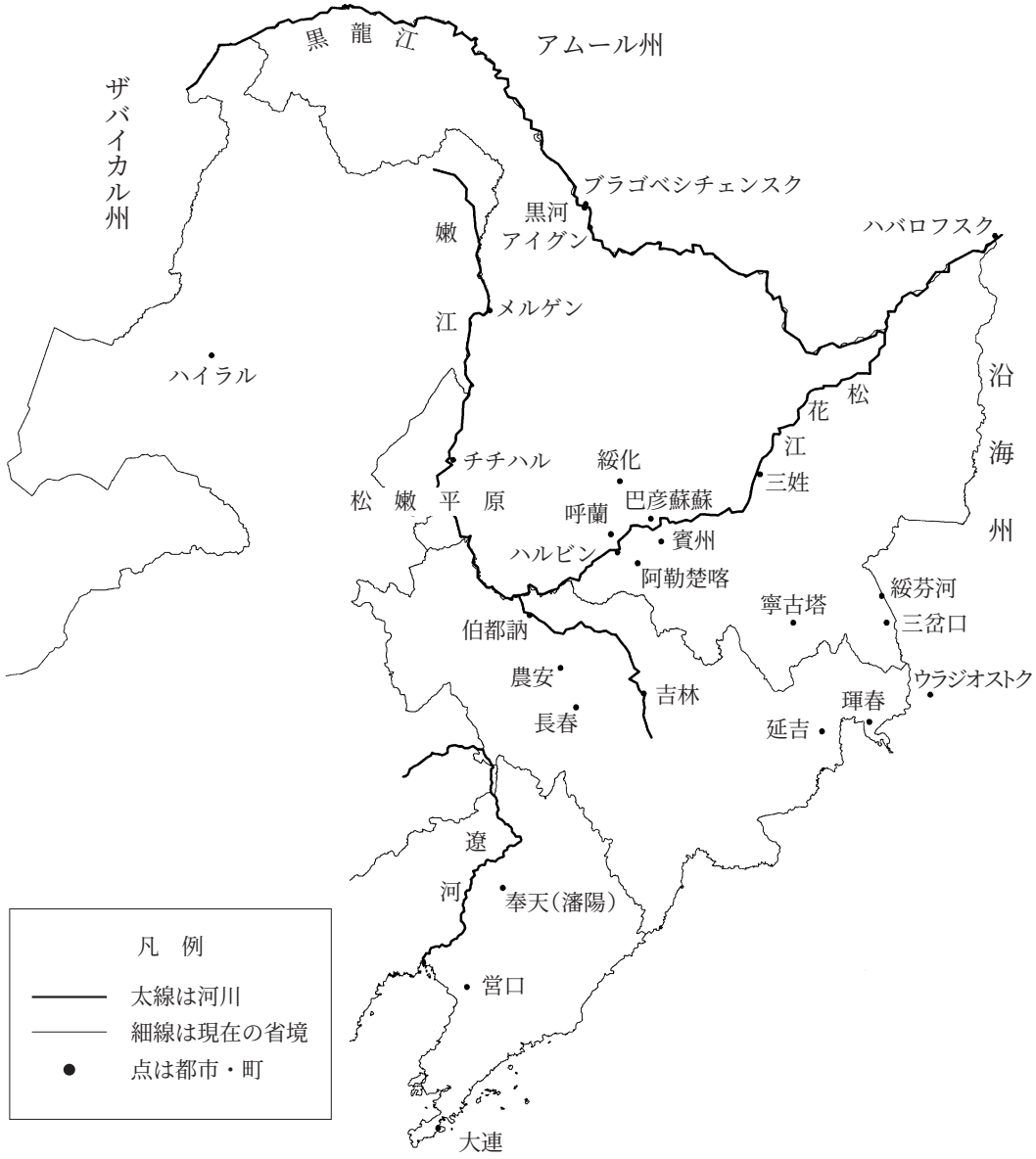
体いつ頃（調査時から何年前）に山東出身の出稼ぎが流入してきたかを記述しており，移民の開始時期を知る上で有用である(注4)。これによると吉林省中部の長春・万金塔・敦化などでは18世紀末以前に流入が見られる。吉林省東部の農安・伯都訥，中部の吉林・五城，東部国境沿いの琿春・延吉，黒龍江省中部の松花江中流域には19世紀前半，開放に先んじて「私墾」という形で流入した。そして19世紀後半には大興安嶺，黒龍江省東部の三岔口･ハンカ湖，中部の賓州･綏化･齊齊哈爾（チチハル），朝鮮国境の間島，そして吉林中南部の伊通に流入が始まった。黒龍江省東部の三姓には18世紀末以前に流入が始まったが，激増したのは1870～80年代のことという。開発地域の広がりは漸進的に北上していったのではなく，先に現在の瀋陽―長春―哈爾濱線沿いの平原が開発され，それから左右の丘陵地帯・山地へと分かれていったようである。ただしそうであってもたとえば長春より南の伊通には19世紀後半までそれ程多くの出稼ぎが入りこんでいなかったのに対して，黒龍江省中部の松花江―嫩江流域の平原（松嫩平原），東部の三姓，さらに奥地の中朝露国境の琿春はこれよりも早く流入が始まるという不均等な開発の進展がみられる［守田 1906, 下巻第八編］。言わば「飛び地」のように開拓地が拡がり人々が入りこんだ。ここで本稿での問題を明確にすれば，松嫩平原，三姓，琿春といった地域への移民流入が他地域に先んじたのは何故かという点にある。おそらくはこれらの地域には19世紀後半に移民を吸引する要因が出現したのではないだろうか。この解明が本稿の目的である。

使用資料について触れておきたい。各地方の地理歴史書である「地方志」および行政文書（いわゆる「档案」）の類に加えてロシア･日本の作成した地誌類，報告書［陸軍参謀本部1889；露国大蔵省1906；守田1906；関東都督府陸軍経理部1911；山田1926］を用いる。この内，陸軍参謀本部（1889）は日本人の手による満洲調査の先駆けともいえるものであり，露国大蔵省（1906）の原著は1897年にポズネーエフ氏により種々の調査資料と研究を基に作成されたものである。この２種は東清鉄道敷設以前，19世紀後半の満洲に関する貴重な情報を提供している。

Ⅰ　19世紀後半北満洲の変容

先に簡単に触れたように，満州はひとつのまとまった地域経済とはとらえられずいくつかの部分から構成されていた。例えば田中（1929, 251-259）は10地域(注5)に分けるが，ここでは一般的に用いられる南満と北満という区分に従う。これは南流して勃海へ注ぐ遼河水系および北流し黒龍江に到る松花江水系と大体境界を同じくしている。北満の松花江では東北平原を貫いて吉林まで汽船の航行も可能であるが，南満の遼河は河底の浅さからジャンク（平底帆船）が通行できる程度にすぎなかった［営口港史編委会 1995, 29］。北満と南満とを連結し，また周辺地域から河川港・都市までの物資の集散の任にあたるのが馬車を中心とした陸運である。以下の記述は時期がややくだるが20世紀初の陸運事情を説明している。

「満洲には道路は到る処甚だ多し。然れども道路に関する賦課義務は毫も存することなく，且つ其の成行に委するのみにして，之が修覆を要することあるも政府は関与することなし」，「而して車輌運輸の最も旺盛なるは冬


黒龍江
アムール州
ザバイカル州
ブラゴベシチェンスク
黒河
アイグン
ハバロフスク
嫩
江
メルゲン
ハイラル
沿
海
州
松
花
江
チチハル
綏化
三姓
松嫩平原
呼蘭
巴彦蘇蘇
賓州
ハルビン
阿勒楚喀
綏芬河
寧古塔
三岔口
伯都訥
農安
吉林
ウラジオストク
琿春
長春
延吉
遼
河
奉天(瀋陽)
営口
大連
凡　例
太線は河川
細線は現在の省境
点は都市・町

季にありとす。蓋し春夏秋の三季は農家の播種収穫の時節にして人馬は皆耕作に忙はしく，特に七八月の雨期に至りては道路泥濘車輪を没し人馬共に苦悩すれども，冬季にありては地盤凍結し其の道路たると然らざるとを問わず，平地を撰んで進行することを得べく，其の容易なること他の三季の比にあらず。殊に又満洲各地の豊富なる農産物が市場に向て運搬さるるの時期たるを以て車馬の交通殊に繁きを覚ゆ」[関東都督府陸軍経理部 1911，第１輯４巻，７，23]。

満洲では地面が凍結し陸運が容易になる冬季に集中的に物資の集散が行われた。満洲各地から営口や遼河流域の港まで穀物を運び［営口港史編委会 1995，33-34］，そこで農家の日用品等必需品を購入し再び各地へ輸送した。なお遼河は冬季には凍結するので輸送された穀物は河川港で雪解けを待って外地へと販出された［雷慧児 1981，106-110］。一般的な馬車では馬２，３頭建で積載量が１から1.5トンであり，１日に20～30キロメートルを行くことが出来たという［黒龍江省公路交通史志編輯室 1988，268-273］。

関内に目を向ければ，すでに清中期から後期にかけての満洲は，奉天米を山東の綿業農家に供給してその繁栄を支え［山本 2002］，一方で華中華南とも海路を経た大豆粕流通を主とする強い連関を有していた［足立 1978］。総じて満州は関内の経済圏の，北満は南満経済圏のそれぞれ延長線上にあったと言える［石田 1964，246-257］。上述のように冬季の運送はたやすかったにせよ，それ以外の季節は輸送効率が低かったため，北満は関内から遠く離れた辺境としての従属的立場に甘んじざるを得なかった。馬車輸送を含めた近現代満洲交通体系の研究は今後の課題ではあるが，交通の困難さが北満の農業開発の阻害要因になっていたと考えられよう。北満では清初以来200年間，薬用人参･淡水真珠などの天然資源の密採は盛んであったものの，漢民族の植民という観点に立てば，定住的性格の農業移民は限定的であった。これは封禁政策の施行もその要因ではあろうが，禁例をかいくぐった私墾の流入すらも緩慢であったのは，ここに人々を吸収する魅力に乏しかったためと考えられる。1860年以降の封禁の漸次解除は「制限」撤廃ではあったが人々を移住へと駆立てる決定的要因ではない。

1858年の瑷琿条約・天津条約，1860年の北京条約によりロシアがウスリー江以東と黒龍江以北を獲得し，さらに海港（注６）を設置することで，北満の経済的位置づけは変化した。つまり渤海航路―遼河水系―陸運―松花江水系をつないで関内から南満，北満へと到るのではなく，直接松花江や黒龍江を通ってロシア領の海港を目指すというルートの出現が北満に変容を迫ったのである。石田（1964，第二部）は，満洲経済が当初は「中国依存の植民地的経済循環」として形成されてきたが，ロシアの満洲進出がこれに「寡占的二重植民地」の性質を附与したというモデルを提示した。筆者は，このロシアの満洲進出に先立つ極東地方の建設がすでに北満経済成長に多大な影響を与えていた，と考える。

「今満洲各城と魯（ロシア）領に属する海湾の距離並に陸路運搬の便益を示し，営子口（営口）又は山海関を経て陸路満洲内部に達するの道程を比較し，以て魯人が満洲の貿易上に於て特殊の権利を有すると思惟せし説明をなさざるべからず。営子口より吉林府に到る凡そ一百八十里，又寧古塔に抵る二百九十六

里余にして，又山海関より吉林府に至る凡そ二百六十里，寧古塔に至る凡そ三百三十九里余とす。然るに魯領波西図港（ポシエット港，ウラジオストクに近接）は吉林府を距る凡そ百六十里，寧古塔を距る凡そ百里，寧古塔は海参崴（ウラジオストク）港を距る百二十六里とす。魯領波西図より吉林府に至るの距離は営子口より同府に至る距離と大抵同一なれども，波西図寧古塔間の里程は之を営子口と寧古塔間に比すれば其近きこと百六十九里，山海関よりするものに比すれば其近きこと二百三十九里とす。加之黒龍江の航運を以て満洲内部松花江の水路に連絡するときはその便実に許多なり」［陸軍参謀本部 1889，207-208］。

視点を満洲を中心に設定すれば，吉林から営口とポシエット湾へはそれぞれほぼ同距離にある。前述の通り季節的変動が激しく春から秋にかけては効率が著しく低かった陸運に対して，松花江・黒龍江は高い水上輸送力を有していた。北満経済は潜在的には北向きの発展の可能性をも有していたと言えよう。19世紀中葉には満洲の居民とロシア領の居民との間で交易関係が取り持たれるようになった。張（2003，23）に引用されているコサック兵の回顧によれば，1850年代璦琿（アイグン）附近の黒龍江上，近隣の村々にて居民同士が物資の交換を行っていた。中国側からは食料品・日用品が，ロシア側からは獣皮・軽工業品が，それぞれ交換に出された。黒龍江以北とウスリー江以東の割譲後，この地域へのロシアの移民は急増し開発が加速化した。たとえばウラジオストクを例にとれば，1871年に沿海州軍務知事の所在地と太平洋方面の主港をここに遷す事に決定され，80年に市の位に昇格した。同年，義勇艦隊のオデッサ―ウラジオストクの定期航路が開設され，83年には初めての農業移民がウクライナから到着した。とはいえロシア人による農業経営は当地の食糧需要を充たすほどに直ちに成長したのではなく，19世紀末に到っても満洲からの食料移入や沿海州に居住する朝鮮民族の農業生産に頼らざるを得なかった［満鉄庶務部調査課 1929，4-6，103-110，122-139；張 2003，26-45；サヴェリエフ 2005，第４章］。1860年代初めの各州の総人口はザバイカル州が35万2500人，沿海州が３万5100人，アムール州が１万3900人であった。これが1897年の第１回ロシア帝国国勢調査実施時にはそれぞれ67万2000人，22万3300人，12万300人へと増加している［ЦСКМВД（ロシア帝国内務省中央統計委員会）1899］。沿海州とアムール州の増加が著しいが，これは農業移民ではなく金鉱などへの鉱山労働者の流入のためであった［張 2003，28］。

表２は吉田（1963）に基づいて，1868年から1910年の中露間の貿易をまとめたものである。黒龍江方面での貿易においてはロシアへの輸出は1870年代の後半から堅調に伸びていく。これと前掲表１の人口推移の動向と重ね合わせると，ほぼ相応して増加している様が看取できる。この黒龍江方面での貿易はアムール州のブラゴベシチェンスク，沿海州ハバロフスク，ウラジオストク（慣例に従い，以後ウラジオと表記）がその主要な場であった。

「満洲中貿易の中央とも称すべきものは奉天府にして錦州府，昌図府，長春庁，吉林府，伯都訥庁，寧古塔城，阿勒楚喀城，齊齊哈爾城，呼蘭城等亦之に次ぐ。且鳳凰庁は朝鮮国に向て通商するの要路たり。琿春城は朝鮮咸鏡道の一帯に接し，露領波西図（ポシエット）港に通ずる要路にして即ち交易の枢要点に属

表2　経路別露清貿易額（1868～1910年）

（単位：1000海関両）

年	オデッサ		キャフタ経由		黒龍江（ロシア満洲）	
	露→清	清→露	露→清	清→露	露→清	清→露
1868				709	84	7
1869			50	1,748	112	7
1870			19	821	77	7
1871		398	0	971	122	17
1872	35	914	13	1,708	193	40
1873		965	1	1,967	26	88
1874		904	1	1,422	75	74
1875		1,369		3,022	101	72
1876		1,000		3,281	99	97
1877	627	512		3,815	114	72
1878		4		3,207	149	130
1879		12		3,988	277	200
1880		1,059		4,055	173	240
1881		1,030		3,183	113	340
1882	9	946		3,286	152	569
1883	11	1,755		3,665	155	385
1884	10	1,251		3,740	248	498
1885	2	947		3,438	193	468
1886	1	1,470		4,948	202	621
1887		1,314		5,704	118	633
1888	292	1,927		4,699	176	707
1889	586	2,829		3,962	180	499
1890	687	3,712		4,528	211	617
1891	884	5,778		4,434	181	918
1892	391	1,955		4,063	160	1,025
1893	704	3,038		5,096	179	1,251
1894	858	3,370		6,257	200	1,396
1895	1,792	4,472		8,370	111	2,761
1896	2,032	4,266	3	8,316	193	2,325
1897	3,234	3,927	1	9,470	207	3,014
1898	1,454	5,005	1	9,796	299	2,997
1899	3,233	5,343		9,988	289	3,226
1900	4,237	6,390		832	137	5,151
1901	3,004	4,831	9	1,702	347	2,748
1902	889	3,794		4,267	346	2,851
1903	1,959	4,139	3	6,384	393	2,256
1904	4,414	2,812		2,203	53	41
1905	1,945	3,556		2,923	72	2,953
1906	32	5,725	1	2,565	522	10,496
1907	28	5,182		1,249	885	10,770
1908	132	5,214	3,033	3,215	5,487	21,129
1909	259	4,854	6,121	4,786	8,856	27,022
1910	902	6,501	8,889	5,020	6,024	24,633

（出所）　吉田（1963, 70）。原資料は各開港場の税関統計資料（海関資料）。

せり。黒龍江城は魯領伯拉照夫琛斯科（ブラゴベシチェンスク）と相い対する所の貿易場なり。然ども魯領の阿墨爾（アムール）州は殖民寥寥たるにより産業挙らず，総て日用食品を満洲内部より仰ぐのみにして満洲に向て輸出するものは少し。三姓城は魯領発巴羅夫加（ハバロフスク）府に対する要点にして松花江の水利により常に貿易を行う所とす」[陸軍参謀本部 1889，205-206]。

例えばアムール州は，当地の需要を支える産業が未成熟であったので，満洲に依存せざるを得なかった。このことは先に述べた1860～1880年代に開発が急進展する地域と深く関係していると考えられる。つまり⑴ブラゴベシチェンスクの南側の松花江・嫩江流域，⑵ハバロフスクに近接する三江平原の松花江下流域と牡丹江流域，⑶ウラジオ・ポシェット港に隣接する図満江流域と牡丹江流域，これらの地域がそれぞれの都市の「後背地」として位置づけられた。そこで，黒龍江城（瑷琿），三姓，琿春のような従来の辺境の小都市が逆に貿易の中心地として脚光を浴びるようになった。関内―南満―北満という経済的連関の末端というよりはウラジオ・ブラゴベシチェンスク・ハバロフスクなどの都市・海港の成長と結びついた関係の上での発展の可能性が生まれたと推測できる。

Ⅱ　ロシア極東の後背地としての北満

本節では以上の考察を更に深め，ロシア極東のそれぞれの都市と北満との関係を検討する。前節で見たように19世紀後半ロシア極東は脆弱な農業基盤故に，食料の輸入と都市への供給が緊要であった。

表３－１　アムール州ブラゴベシチェンスクへの輸出

単位：プード（１プード＝16.38kg）

年	軍需部門による購入	金鉱会社による購入	酒造工場による購入	合計
1887	65,799	144,379		210,178
1888	70,000	79,195		149,195
1889	9,300	196,179		205,479
1890		33,670		33,670
1891	28,000	181,549		209,549
1892	11,415	130,962		142,377
1893	84,450	34,797		119,247
1894	2,150	282,127		284,277
1895		216,643		216,643
1896	29,500	150,000		179,500
1897	169,000	305,526		474,526
1898		193,530	46,145	239,675

（出所）　張（2003, 35-36）。
（注）　ただしこれ以外にもアムール州の住民による購入分がある。
一例として，1894年には50万プード，95年には40万プードの糧食がブラゴベシチェンスクに輸出された。（表３－２）
原資料は1893年までは露国大蔵省（1906, 558-559），94年以降は Т. Полнер“ ***Прамурье*** ” Москва. (1909, 504-505)（筆者未見）。

表３－２　ブラゴベシチェンスクへの輸出貨物内訳

単位：家畜は匹(頭)，それ以外はプード。

品目	1894年		1895年	
	数量	価額(ルーブル)	数量	価額(ルーブル)
牛	18,000	800,000	17,000	900,000
羊，豚，その他家畜類		40,000		30,000
家畜の脂油		20,000		35,000
米，燕麦，麦粉その他	500,000	300,000	400,000	275,000
植物の油種子，油糟	50,000	60,000	50,000	60,000
麻綱，大麻その他	6,000	11,000		16,000
干し果物，野菜，果実		10,000		10,000
裘衣，革器，支那製小雑貨		20,000		25,000
葉煙草		9,000	3,000	10,000
合計		1,270,000		1,361,000

（出所）　露国大蔵省（1906, 557)。

表３－３　ブラゴベシチェンスクへの家畜・肉類の輸出

年	
1885	牲畜6,600頭・肉80,000プード
1886	牲畜5,000頭
1886-88	毎年牲畜45－50万ルーブル
1889-91	毎年牲畜１－1.2万頭，65万ルーブル
1893	馬2,711頭，牛１万5,928頭，羊3,176頭
1894	牛1.8万頭　80万ルーブル；羊豚家禽　４万ルーブル
1895	屠殺牛　1.7万頭　90万ルーブル；羊豚家禽　３万ルーブル
1896	牲畜１万9,500頭
1898	牲畜２万2,960頭

（出所）　張（2003, 36)。

まず第１にブラゴベシチェンスクとその後背地について述べる。表３は露国大蔵省(1906)と張(2003)によりアムール州への輸出状況を表したものである。表３－１は軍事部門，鉱山，酒造会社による購入分の推移，表３－２は1894～95年のアムール州住民の購入分をあらわしたもの，表３－３は家畜と肉類の購入分の概況をまとめたものである。表３－２と表３－３から明らかなようにこの地域では家畜類・肉類の取引が最も多く，穀類がそれに次ぐ。この家畜は運搬用・農耕用のみならずブラゴベシチェンスクと鉱山に供給される食肉用でもあった。この家畜の買付の為ロシア商人が満洲に入りこむ事もあった。表４は1875～93年ザバイカル州・アムール州から海拉爾等の取引場へ買付に来たロシア商人の数である。海拉爾はモンゴル方面からの家畜の集散地として知られていた(注7)。

さて黒龍江を挟んでアムール州と相対する瑷琿から松嫩平原に連なる地域はつとに漢人の流入が確認されるところでもある。たとえば当地

表4　海拉爾･寿寧寺･鄂爾順河へのロシア商人の来往

年	海拉爾		寿寧寺		鄂爾順河	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数
1875			1	8	1	7
1876	10	50	7	30	2	14
1877	5	22	1	7		
1878	44	256	3	21		
1879	16	159	6	22		
1880	23	133	4	21		
1881	32	186	13	91		
1882	43	342	20	106	5	22
1883	54	406	15	94		
1884	60	464	12	96		
1885	81	643	22	173		
1886	106	1039	13	93		
1887	105	995	28	176		
1888	52	394	16	88		
1889	41	338	10	54		
1891	29	251	10	77		
1892	46	315	18	112		
1893	50	309				

（出所）　張（2003, 30）。原資料は『黒龍江将軍衙門档案』。

最大の都市齊齊哈爾は松花江支流の嫩江沿いに位置する。

「省内及び蒙古に産する牛羊豚鶏等は一旦齊々哈爾に聚集し黒龍江城へ輸送して伯拉照不琛斯克府（ブラゴベシチェンスク）近傍の魯人に売与するもの頗る許多なり。」「黒龍江省齊々哈爾は貨物輻湊の要点にして遠近の畜類穀物等を一旦此処に聚集し後ち魯領阿墨爾（アムール）州に輸出す。其陸路墨爾根（メルゲン）を経て愛琿に送致するを以て途上輪蹄絡繹たり。冬季は尤も頻繁なるものとす」［陸軍参謀本部 1889，200-201］。

このように当地はモンゴル方面や松嫩平原の家畜・穀物の集散地だった。なお松嫩平原は遼河流域と並ぶ穀倉地帯であるが［満鉄経済調査会第二部 1933］，その中に位置する呼蘭や巴彦蘇蘇は，

「呼蘭城…本城近傍は地味膏腴穀類産出の多額なるを以て七十二の官倉を設け官穀を蓄蔵し，墨爾根愛琿等の各営に糧食を輸送し，又河中には焼酎及び穀類を輸出する舟楫の往来頻繁なり。市街の北端より北方北林子に通ずる道路あり。巴彦蘇々に出る道は村落相い望み富裕の醸酒舗頗る多し」［陸軍参謀本部 1889，302］。

というように周辺の穀物を集荷する。その一部は北行してアムール州へ，一部は後述するように東行して巴彦蘇蘇から三姓へ，そしてハバロフスクまたはウラジオへと輸送された。この北行の物資は墨爾根を経て瑷琿へと運ばれた。

「墨爾根城…本市城は殖産未だ開けざるを以て貨物を逓送するの一市城に過ぎず。只だ冬季に至り魯商此地に来り獣畜を密売するものありと云う。」「愛琿城（一名黒龍江城）…此地露領と犬牙錯接す。……。此地の商賈は山西，山東両省の民尤も多きに居り首として土着人の雑穀及び獣畜を収めて魯領に輸致し及び悉比里（シベリア）各鉱の密売沙金を買収するを以て第一の目的となす。現今貿易漸く熾盛に赴くの勢あり。商賈の下等なる者に至りては概ね魯領に入り其白照不琛斯科（ブラゴベシチェンスク）府に在る者一千有余人とす」［陸軍参謀本部 1889，303-306］。

「魯領伯拉照夫琛斯科（ブラゴベシチェンスク）は其（愛琿）対岸にして，黒龍江の上流十里にあり。江の左岸即ち魯領は新開の土地なるにより物産寡なく，食料其他の物貨は其供給を満洲に仰ぐを以て此地は輸出品の埠頭となり，近時に至り大に繁昌に赴くの景況あ

り」［陸軍参謀本部 1889，250］。

「満洲より『ブラゴウエン〔シ〕チェンスク』府へ蔬菜を輸入すること莫大にして夏季大なる『ジャンク』に搭載して此地方に輸送せらる，是等の蔬菜は又礦山地方にも輸送せらる」［露国大蔵省 1906，559］。

瑷琿に集まった物資はジャンクによって黒龍江を渡りブラゴベシチェンスクとその近隣の鉱山地帯へと運ばれた。資料中に食料，蔬菜に言及されているが，これらは都市民や鉱山労働者に供給されていた。瑷琿は辺境貿易の成長によって急成長したのである。当地の地方志には次のような記述がある。

「（そこで）ブラゴベシチェンスク市対岸の黒竜江右岸の黒河屯は僅かに農業を営む旗人の人戸が十数戸あっただけだったが，これ（ブラゴベシチェンスク建設を指す）以後には瑷琿の商店が黒河で分号（分店）を開設するものが現れ，日毎に黒龍江を渡っての貿易が成長した。年月が流れて黒龍江左岸のロシア人が増加し，所用の食料や雑貨がはなはだ多くなってきたので，中国の商戸がブラゴベシチェンスクの繁華街に板造りの家を建てる事が許され，二十数カ所にもなった。」「さらに黒龍江左岸の村には小さな店もあったが多くはなく，ただ補丁屯には酒屋が三十余家あった。ここはロシアの各村からブラゴベシチェンスクへ往来する街道に位置していた。ロシア人は老若男女を問わず酒を好む者が多かったのでその酒屋はとても繁昌し，各店には数十万斤を超える酒が貯蔵されていた。」(注8)

寒村だった黒河屯は，ブラゴベシチェンスクの対岸という立地から急速に発展を遂げた。さらにはブラゴベシチェンスクやアムール州の農村にも中国人商人が進出するようになった。この資料から酒類をロシア人に販売する商人の存在が確認できる。

第２に沿海州のハバロフスクとその後背地について述べる。この地方の都市，三姓は松花江と牡丹江の合流点に位置し，清朝の辺民制度の拠点として副都統が置かれ黒龍江中下流域やサハリンの先住民の収貢を取り扱っていた［松浦 1987；佐々木 1996］。三姓とハバロフスクとの間の交通は松花江の水運に依った。松花江を下って８－15日，松花江と黒龍江との合流点に近いミハイロセミョーノフスカヤまでは４－８日という旅程である［陸軍参謀本部 1889，203-204］。三姓を経由する貿易の状況は以下の通りである。

「三姓城…本城と寧古塔との通路は独り牡丹江（瑚爾哈河の別名）流に由るものとす。西瓜，蒜，海米，海菜，海参等の貨物を寧古塔より積来り，当地より穀類焼酎等を輸送せり。本城の近傍は農業能く開け穀類の収穫多しと雖ども，未だ他方に輸出するの余裕なきを以て，魯領及び寧古塔等の地方に致す穀物焼酎等は之を呼蘭河城及び巴彦蘇々等の地方より来り更に之を転売するものと云う」［陸軍参謀本部 1889，296-297］。

「巴彦蘇々…当地の穀類は松花江の水利に因て之を魯領沿海州に輸出し就中白麺小糜子等は海参崴（ウラジオ）港に陸送すと云う」［陸軍参謀本部 1889，303］。

松花江の上流にある呼蘭府・巴彦蘇蘇から穀物の一部は前述の通り嫩江を遡り墨爾根，瑷琿，そしてアムール州へと移出されていたが，一方では松花江を東に下り三姓を経てハバロフスク方面へ，また牡丹江を遡って寧古塔へ輸出された。やや後の資料でかつ不完全ではあるが，三

姓副都統衙門の档案に光緒21-23年（1895－97年）三姓とハバロフスク方面とを往復する中露商人の船舶についての報告書が遺されている。それをまとめた表５から中露双方の商人が頻繁に往来している様が窺われる。下流（ハバロフスク）方面へ向かう船に比して，上流（松嫩平原）へ向かう船の荷については記述がないという特徴がある。これはおそらくは空荷を意味しており，物資の買付の為に目的地に行こうとしているのであろう(注9)。1893－95年のハバロフスク方面との貿易の内訳は穀物と穀物粉12万4401ルーブル，食品２万6274ルーブル，家畜・肉類1359ルーブル，日用品1586ルーブルであった［露国大蔵省 1906, 561-566］(注10)。ブラゴベシチェンスクと後述のウラジオとの交易では家畜類の取引が最も多いが，ハバロフスクでは穀物の取引が圧倒的に多い。この違いは，おそらくはブラゴベシチェンスクとウラジオへの往来が陸路経由であるのに対しハバロフスクは水路（松花江）が主な交通手段であった為なのかもしれない。後に引用する1876年５月４日の档案資料に拠れば，家畜は陸路を歩かせてロシア領に送られたようだ。

第３にウラジオとその後背地である。牡丹江流域の寧古塔，中露国境近くの三岔口及び中朝露国境の琿春，これらを含む地域がそれである。表６－１，６－２は1891－95年にかけての満洲東部とウラジオ方面，すなわち南部ウスリー地方との交易を表したものである。なおこの２つの地域の間には７カ所の哨所（Застава）が設けられていた。その中でもポルタフスカヤ（Полтавская），マングガイスカヤ上流（Верхне-Мангугаиская），琿春（Хуньчуньская）の各哨所を通過した取引量のみが資料に残されている。なおポルタフスカヤ哨所を経る貿易が最も盛んであった(注11)。ここからは哨所を通過しない密貿易の数字は窺い知ることができないが，大体の傾向は分かる。満洲東部でのロシアとの交易は家畜の取引が主流である。後述するようにこれは食肉用が相当数含まれていた。またブラゴベシチェンスクとの交易の例を参考とすれば，表中に「貨物」として一括されている中で穀物が高い割合を占めていたことに間違いはないだろう。三姓からはハバロフスク方面と共に寧古塔方面へも物資は輸送されていたが，その中には現地で消費されるものに加えて三岔口・琿春経由でウラジオへ移出されるものも含まれていた(注12)。

「南烏蘇里地方住民の需要を充すの点より立論するときは，満洲との商業は甚だ重要なる意義を有するものなり，何となれば此地方の住民は，殆んど常に穀物或は主もに屠殺或は労働に供するの家畜の不足を仰ぐが故なり」［露国大蔵省 1906，572］。

「寧古塔…本城は四達の地にして東は三岔口より魯領の尼古里斯克（ニコリスク）及び興凱湖一帯の地に通じ，南は琿春より朝鮮の慶源府及び魯領の波西図港及び海参崴港に向うべし。北は三姓城に通ずる軍道あり。且瑚爾哈河を下れば三日にして直に三姓に至るを得べし。実に吉林省東方の要衝と称すべし。此地初は寒威酷烈の気候たりしも近年人煙稍稍繁殖するに及び季候漸く温和に至りしと云う」［陸軍参謀本部 1889，294-296］。

三岔口はロシア領と接する処である。

「三岔口は西北に綏芬河あり。東は三岔河を隔て直に魯領に接す。市街は近時の開設にして未だ人煙繁盛なるに至らず。此地は魯領に隣接するを以て満洲の商賈来り集り外国の

表５　三姓を通過する貿易商人（1895～98年）

日付	人名	船数	貨物	行先・備考
1895年閏５月４日	俄(ロシア)商博各達訥夫(Bogdanov)・華(中国)商狄豊太(Tifontai)等	火船１・木船１	？	上流へ
1895年閏５月29日	俄商博各達訥夫(Bogdanov)等	火船１・木船４	大牛90条・馬８匹・騾子５頭・小麦396石6斗・糜子米３万斤・白麺3045斤・羊毛4260斤・羊絨559斤・線麻1950斤，毛毡100条，片煙6412斤	下流へ
1895年６月29日	華商紀鳳台(Tifontai)，柜夥馬英	俄国火船１・木船１	？	上流へ
1895年６月30日	華商紀鳳台，柜夥馬英	俄国火船１・木船３	小麦４万4000斤・大麦２万6000斤・白麺3320斤・尖牛73条・馬７匹・豆油3930斤	下流へ
1896年９月５日	伯力(ハバロフスク)商紀鳳台，柜夥孟憲隆	火船１・木船１	？	上流へ
1896年９月13日	伯力商紀鳳台，柜夥孟憲隆	火船１・木船３	大麦２万斤・小麦10万50斤・元米２万2000斤・糜子米３万斤・豆餅26000塊	下流へ
1897年１月13日	俄人鶏毛非業福(Zinov'ev)	陸路	雑色牛73条・繕馬１匹	陸路下流方面へ
1897年３月１日	俄人一万諾夫(Ivanov)等	陸路	雑色牛107条	陸路下流方面へ
1897年３月12日	俄人沙文叩夫(Savinkov)等	木船１隻	雑色牛49条	下流へ
1897年４月21/22等日	俄商波柯大諾夫(Bogdanov)・一賽耶夫(Iasaev)	各輪船１・木船１	糧食	下流へ
1897年４月23日	俄国商人波柯大諾夫，一賽耶夫	各火船１・木船１	？	松花江・卜魁等処へ貿易に行こうとしたが帰らせた。
1897年４月24日	俄商一賽耶夫	火船１・木船	牲畜・糧食	上流各処へ牲畜糧食を買いに行こうとしたが帰らせた。
1897年５月12日	俄商波羅為奴(Voronin)・紀鳳台	火船１・木船１	？	松花江・卜魁等処へ貿易に行こうとしたが帰らせた。
1897年５月13日	俄国黒河人波羅為奴・紀鳳台	火船１・木船１	？	松花江・卜魁等処へ貿易に行こうとしたが帰らせた。
1897年５月25日	俄国人蘇喜和(Sysoev)・紀鳳台	火船１・木船２	？	松花江・卜魁等処から下流へ。
1897年５月26日	俄商滅烈鉄夫(Miliachev)	輪船１・木船１	糧食	松花江・卜魁等処から下流へ。
1897年５月28日	俄国人滅烈鉄夫	火船１・木船１	牲畜糧食	下流へ
1897年６月７日	俄国船	輪船１・木船１	？	下流へ
1897年６月15日	俄人滅烈鉄夫	火船１・木船１	豆餅１万4597塊・尖牛87条	下流へ
1897年６月23日	俄商蘇喜和	火船１・木船１	？	下流へ
1897年７月12日	俄国廓米薩爾(Komissar)，頗勒闊倭尼克(Polkovanik)，葛倫巴且倭斯克(Gorbachevski?)，俄華商紀鳳台	火船１・木船２	糧食	下流へ
1897年７月22日	華商紀鳳台	民船10隻	穀米	巴彦蘇蘇から下流へ
1897年７月25日	俄商蘇喜和	火船１・木船１	？	下流へ
1897年８月１日	俄国船	輪船１・木船１	糜子米150石・小麦100石・尖牛100条	下流へ
1897年８月13日	俄国船	火船１・木船２	牛条・大麦	下流へ
1897年８月20日	俄商蘇喜和	火船１・木船１	小麦500石・豆餅1000塊	下流へ
1897年８月22日	俄商波羅為奴(Voronin)	火船１・木船１	大牛42条・糜子米50石	下流へ
1897年９月２日	俄国船	輪船１・木船１	大牛48条・大麦8000舗（プード）	下流へ
1897年９月10日	俄国黒河商人一賽耶夫等	火船１・木船１	肥豚	伯都訥域内にて民船を雇い下流へ
1897年９月13日	俄商蘇喜和	輪船１・木船１	小麦4000舗(プード)・白麺1000舗(プード)	下流へ
1898年４月20日	俄商蛾楽寧(Olenin)	火船１・木船１	？	下流へ
1898年４月25日	俄商蘇喜和	火船１・木船１	？	下流へ
1898年５月10日	俄商薩瓦斐子金(Sevast'ian?)	火船１・民船２	小麦292石	下流へ
1898年５月15日	俄商不亜諾夫(Pianov)	火船１	？	下流へ
1898年６月２日	俄商一賽耶夫	雇用民船１	大麦300石	下流へ
1898年６月16日	俄商吉利霍力闊西欽(Zil'kovich)	火船１	牛羊牲畜	下流へ
1898年６月20日	俄商斜立也夫(Shaliev)・不開立国夫(Pugalikov)・伊万(Ivan)	火船１・木船１	小麦牛条	下流へ
1898年６月25日	俄商班乗克(Panchenkov)	火船１	小麦１万4340舗（プード）	下流へ
1898年６月25日	俄商倭西立也夫(Vasil'ev)	火船１・木船１	？	下流へ
1898年６月20日	俄商博各代克・不牙立国夫(Poiarkov)・司庫拉独夫(Skladov)等	各火船１・木船１	？	下流へ
1898年７月７日	俄商一腮夫(Iosif)	火船１	？	下流へ
1898年７月16日	俄商夫徳洛(Fedor)・不牙立国夫等	各火船１・木船１	？	下流へ

（出所）「三姓副都統衙門来往俄船帯貨数目冊報」光緒二十四年［吉林師範学院古籍研究所1995, 9-12］。
（注）　ラテナイズされたロシア商人の名前は筆者による推定である。

表６－１　満洲より３哨所経由南部ウスリー地方への輸出（1891～1895年）

単位：紙幣ルーブル

	1891	1892	1893	1894	1895
ポルタフスカヤ経由					
貨物	303,446	626,338	479,390	172,009	314,981
生牛	68,800	117,840	158,120	186,150	121,350
馬，牝羊及豚	28,415	53,910	65,235		
マングガイスカヤ上流経由					
貨物	7,053	8,459	17,162	13,402	24,608
琿春経由					
貨物	103,541	300,028	309,261	155,407	179,377
生牛	154,120	317,040	314,400	267,550	289,100
馬，牝羊及豚		1,520	18,895	42,525	4,035
合計	665,375	1,425,135	1,362,462	837,043	933,451

（出所）　露国大蔵省（1906, 755）。

表６－２　南部ウスリー地方より３哨所経由満洲への輸入（1891～1895年）

単位：紙幣ルーブル

	1891	1892	1893	1894	1895
ポルタフスカヤ経由貨物	676,104	1,175,076	573,263	136,264	465,075
マングガイスカヤ上流経由貨物	5,251	4,477	2,463	4,384	7,709
琿春経由貨物	216,974	775,169	287,767	218,338	1,395,981
合計	898,329	1,954,722	863,493	358,986	1,868,765

（出所）　露国大蔵省（1906, 764-765）。

物貨を購求して内地に輸送す」［陸軍参謀本部 1889，262］。

ここには満洲側の商人が参集しロシア側の商品を買い付けていたが，同時にロシア側へも物資の販出がなされたと考えられよう。現在の露中朝３国国境に近い琿春については所管の三姓副都統衙門の1876年５月４日の档案資料に，

「愚考しますに，厄木和羅は交通の要路にあり，近頃西方より牛を追ってくる者が続々として絶えず，三十，五十，甚だしい場合には百十数頭を一群として，一日また一日と東へと向かい途切れる事がありません。その目的地を尋ねると，みなウラジオへ行ってロシア人に売り食用に屠殺するとの事です。」(注13)

という報告がある。このような記述は他にも幾つかあり(注14)，総じてロシア商人がこの地域に現れ穀物・日用品・家畜などを購入していた様がみえる。これに加えて国境近くの地域ではロシア向けの商品が盛んにつくられるようになったという。

「烏蘇里（ウスリー）江に於ける商業は全く登録せられず，境界地方の清領は住民甚だ希薄なれども，然れども苟も村邑の設立せられたる地方は，商店及び露国領に輸出する予定を以て設立せる焼酎製造所あり。支那の商人は境界通過点に関する規定を全く蹂躙し，烏

蘇里江を渡り自由に露領に入り，哈薩克土族と相貿易し，諸種の小雑貨，殊に焼酎を販売す。蓋し是れ等商貨の大部は，松花江より『ジャンク』に搭載して輸入せらるるものなり，松花江の商人の最も有利なるものは彼等籠蓋中にある露国土人との商業にして，斯は主として物品交易なり，支那人は自己の商貨を以て毛皮，人参，鹿角及び獣獵漁業より獲らるる天産物と交易す」［露国大蔵省 1906，570］。

ウスリー江流域の中国領に属する村落はロシア領との交易を生業のひとつとしていた。ロシア領からは毛皮や薬用人参など天産物が，中国領からは雑貨・焼酎など生活用品が輸出されていた。

このように満洲からの食料輸出が加速するにつれて，ロシア極東地方では両地域にまたがって活動する中国商人のすがたも見られるようになった。

「上陳せる陸路満洲に輸出する南烏蘇里の物産中，海参，海蟹等其他の海産物を説明するの要あるを見る。一千八百八十年の初めに至るまで，南烏蘇里の沿岸に於ける海産業は，総て琿春市の商人の専有に属す。該海産業には琿春地方に住する窮境に瀕せる満洲人及支那人の負債を返却する能わざるもの，又は烏蘇里江，黒龍江に住する土族を雇い来る，斯くて清商は満洲人等に小舟，器具，衣服，糧食を給し，毎年四月彼等を露領の沿岸に送派す。……。一千八百八十年より一千八百八十一年に至り，該海産業は大に支那人の注意を喚起して，毎年芝罘地方より浦塩斯徳に来るもの続出するに至れり，該事業の支那人に対し有利なるを見て次第に満洲人を圧迫し，山東地方より入り来る，支那人より成る浦塩斯徳の商会は，漸次琿春の商人を駆逐して，該事業を己れの掌中に収むるに至れり，此時より該海産物の陸路満洲に入るもの次第に減少せり」［露国大蔵省 1906，574-575］。

南ウスリー地方での満洲産品の取扱は1880年代までは琿春出身者が主導権を握っていた。後には山東出身者が進出しこれに取って代わるが，これは当地が活況を呈する交易により従来のような辺境とは位置づけられなくなったことを意味する。特産品の買付，ロシア側での商品の販売でも中国商人の活動が活発になった。1897年実施のロシア帝国第１回国勢調査の「母語別の職業」の項目によれば，沿海州各都市のロシア系商人は366戸，中国系は1905戸であった。小商い・行商・定義づけ困難な部類（以下，小商いとする）に限定すればロシア系82戸に対して中国系789戸である。アムール州ブラゴベシチェンスクのロシア系商人は643戸，中国系861戸であるが，同じく小商いについては248戸に対して745戸である。続いて農村部に注目しよう。沿海州の農村部では商業全体でロシア系256戸に対して中国系857戸，小商いではロシア系102戸に対して中国系438戸であった。アムール州の農村部ではではロシア系246戸に対して中国系156戸，小商いではロシア系116戸，中国系145戸であった。都市・農村部ともに中国商人が商業を掌握，その傾向は小商いに顕著であった。中国商人は単身でこの地に来住し，都市の小売部門でロシア商人に対して優位に立っていた（注15）。

これまで見てきたように，満洲からロシア極東へは穀物，蔬菜，酒，家畜，肉類など食料品，及び日用品が輸出されていた。それは当地方の農業基盤の脆弱さ，急速に進展する都市化，鉄

道港湾の建設によるものである。物資は松嫩平原から北行してアムール州へ，或いは東行して三姓を経てハバロフスクへ，寧古塔を経てウラジオ方面へというルートにそって流通した。そしてこのルート上の，或いはそれに程近い松嫩平原，三姓，寧古塔，琿春において，19世紀後半（特に1870年代以降）人口流入が顕著になった。

むすびにかえて――19世紀後半北満洲の開発――

19世紀後半の北満の穀倉地帯では，過剰な外地への販出の為発生した穀物・家畜の不足が懸案事項として採りあげられるようになった。たとえば松嫩平原の阿勒楚喀では副都統衙門の1876年２月１日の档案資料に，

「調査したところに拠ると阿勒楚喀所属の地域では近年豊作のようではある。しかしながら繰り返し荒地を開放して移民を集め人々が集まってくるので，一年の粟の需要に照らせば，当地の用を満たす程度である。今聞くところでは阿勒楚喀に来る商人は勝手に価格をつり上げて粟等の食料を買い，ひそかに他の街へ運んで売り払っている。また輸送業者も一儲けを企み搬出している。もしこのまま他所へ運んで売り払うにまかせれば，止まるところを知らず，当地の食料が欠乏し，阿勒楚喀全体が大きな禍を被る事となろう。全くもって当地にとって害を為すものであるから，直ちに禁止せよ。」(注16)

という命令がある。当地住民への供給よりも外地への販出の方が高利潤を期待できるため，商人・運送業者ともに過剰な輸出を行った。同じく阿勒楚喀では家畜についてもやや後の1898年２月５日に次のような命令が出された。

「ここに本年春季に壇廟を祭るに際して，祭期になる毎に牛を調べているが概ね全てやせ衰えて，角の形が合格するのが滅多にいない。その理由を調べてみると，蓋し外来の商人及び本地のイスラム教徒が禁令に違反して利を漁り他地域へと売却しているためである。また先には明文を奉じて耕牛の出境を禁止している。利を貪り価格をつり上げロシア人に売り払い害を受けないようにせよ。」(注17)

これらの事例は阿勒楚喀の事例ではあるが，1860－70年代以降には穀物と家畜の販出という問題が各地で発生していたと考えられる。たとえば1862年４月７日の档案資料に次のような報告がある。これは東部国境での事件である。

「調べましたところ当地とロシアの占拠する摩闊崴とはとても近いところにあります。そこで珠倫，仏多石，岩杵河，棘心河の各関所に命じて常に臨検を行うようにしました。あろうことか当地の流民が許可証を携帯せずひそかに摩闊崴に行って交易し，さらには牛を盗んで連れて行き交換する者もおります。今，民人尹発，オイラート人常奇爾倫は牛を盗んで既に捕らえられました。まだ逮捕されていない者もまた少なくありません。」(注18)

人口増加・開発進展により食料・家畜の需要が高まるにもかかわらず，外地への輸出が続いたために食料価格高騰と耕牛不足が取り沙汰されるようになった。これはたしかに食料の払底という由々しき状況ではあったが，一面では北満農業の好況，販売価格の高騰による高利潤の期待，それに付随する大量の雇傭機会出現を裏付けており，それは関内及び南満から多くの人々を引き寄せるのである。本稿冒頭で述べた先行

研究においては，移民は“人多地少”という関内の人口圧力の高まりに析出された，土地獲得を渇望するやむにやまれぬ窮迫農民の移住，とされている。しかしロシア極東の発展が牽引する北満の好景気故に自発的にこの地を目指したという積極的側面も否定できない。だからこそ開拓地は漸進的に北上したのではなく，一気に北満の広い範囲へと急拡大し，中でもロシアにほど近い松嫩平原，三姓，琿春といった地域に比較的早期に出現したと考えられる。

1870年５月から６月にかけて満洲を縦断したパラディウスの残した記録には次のようにある。「満州を旅する者を特に驚かせる今一つのことは，一時的滞在者と定住者であるとを問わず，漢人の影響下に急速にかつ着実に進行する国の漢化である」［井上 1991，131］。ここで一時的滞在者と定住者の２つの範疇に分けられていることに注目したい。一時的にこの地に滞在し再び故郷の関内へと還流していく人々，つまりこの地に雇傭を求めて押し寄せてきた出稼ぎの存在を窺い知ることができよう。筆者もかつて満洲への移民は山東からの出稼ぎが主流であり，いつかは故郷へ帰る性格を有していたと論じた［荒武 1998，1999］。たとえば齊齊哈爾は1880年代には「其種族は満，漢，蒙古，回子，達瑚爾，鄂魯春，索倫等にして言語各異なりと雖ども，大抵漢語を解せざるものなし。商賈は山西省地方の人多く，人口凡そ五万余とす」［陸軍参謀本部 1889，301］というように各民族が雑居する街であった。ここでは商業での山西省出身者の勢力に言及されているが，19世紀末から20世紀初には「山東出稼者の入境は今より四十年前姓劉なるものを先達とし，歴年愈聚り愈多し。之等農工商業を併有し，山西其他各省の人ありと雖も，山東人最も多し，且つ勢力あり」［守田 1906，下巻，505］というように40年前（＝1860年代）に初めて当地に現れた山東からの出稼ぎが農工商各産業部門で主流を占め，商業部門でも山西省出身者の勢力を圧倒してしまった［荒武 2005］。この山東からの「一時滞在者（＝出稼ぎ）」の増加がこの時期の北満開発の特徴の一側面である。彼らは成長する都市の様々な職業を担うという性格も有していたが大部分は農業部門での就労を目指したのである。満州農業の一年一作という条件下では除草期と収穫期に大量の労働力が必要とされ，労働力市場での純粋な需給調整の結果労賃が急騰する［石田 1942，103-109，146-157］。ここで述べたような農業での好況がある以上は，開墾に従事する人のみならず，このような労働力も必要とされた。故に人々をこの地へと吸引したのである。

以上本稿は19世紀後半，特に1870年代以降ロシア極東の成長に牽引されるように北満経済は刺激を受け，開発の進展と移民の流入が見られたということを明らかにした。これは北満の地域経済のあり方にも多大な影響を与えたと言える。北満社会は南満や関内のそれとは異なり，市場町が少なく県城への機能集中が著しいという［安冨 2002］。道路，鉄道，河川の交通の要道に沿ったところから開墾が始まった。これは本稿の議論に則して言えば第１には開発当初より外地への穀物販出という性質が強かったこと，第２には開発が急速に進展したということによるだろう。このような北満の性格形成は1900年代，東清鉄道の完工と営業開始，付随する移民の激増の下でより顕著になった。だが1870年代前後にはその萌芽はすでに現れていたのである。サヴェリエフ（2005）は，19世紀後半のロシア

極東に出現した中国人，朝鮮人，日本人による移住民社会についてのモノグラフである。氏は当地の開発に対して移民の果たした役割を高く評価している。この論点は本稿の述べきたった所と大いに関わるものであり，国境をもって研究対象地域を分断することの危うさを伝えてくれる。満州とロシア極東の両方を視野に入れた研究の深化が今後の課題と言えよう。

（注１）2000年遼寧省・吉林省・黒龍江省３省の人口は約1065万人だった。なお内蒙古自治区の一部も旧満洲を構成していたが，その分の人口は含まれていない。各年の『中国人口統計年鑑』および若林（2005，6-7）など参照。

（注２）膨大な蓄積があるが，さしあたり楊（1991）・衣（1993）・孔（1994）参照。

（注３）同上。なおこのような視点を明確に出しているのが小峰（1991，第３・４章）である。

（注４）このような植民開始時期を著した資料には南満を中心とした満洲国実業部臨時産業調査局調査部第科（1936）や満洲全域を扱った山田（1926）・熊（1933）といったものもある。守田（1906）は，その中でも早い時期に調査が行われたという特徴がある。

（注５）遼東半島区，遼東山地区，遼河流域区，遼西区が大体南満に属する。松花江上流流域区，北東山地区，松花江及び嫩江流域区，西遼河流域区，北部山地区が大体北満である。興安嶺以西区がかつての蒙地，ほぼ今の内蒙古に相当する。

（注６）ウラジオストクは1860年にその基礎が築かれ，1862年に自由港となり，さらに1871年には極東の主港となった。

（注７）「海拉爾は北満洲に於ける重要なる家畜市場の一たり。毎年墨爾根及『ブラゴウエシチエンスク』或は齊々哈爾の二街道を経由して露領各地殊に浦塩斯徳其他に家畜の輸送せらるるもの数万頭の多きに上れり」［関東都督府陸軍経理部1911，第２輯７巻，495］。

（注８）「於是俄城（ブラゴベシチェンスク）対岸江右黒河屯，僅有種地旗戸十数家，従此瑷中商舗始有在黒組織分号者，日以過江貿易頗漸発達，年積一年，而左岸俄民繁聚，応用食料諸貨甚多，准我商戸在於該城衝繁之閭修設板房，致有二十余処。」「且江左各屯雖有小舗無幾，独有補丁屯売酒舗商有三十余家，此係各俄屯来往俄城通衢大路。而俄人勿論男婦大小素好嗜酒者為多，該各酒商十分発達，所以毎戸存酒動逾十数万」［孫蓉図・徐希廉1931，巻八・武事志『瑷琿城自昔創設以来更迭変治紀』］。

（注９）「三姓副都統図欽為報界内大江両岸除霍爾托庫地方有俄人駐扎外余皆無駐扎囤糧等事咨吉林将軍衙門」咸豊六年（1856年）八月初一日［遼寧省档案館1995，381-382］によれば，1850年代の資料であるが，ロシア人は穀物の買付の為ひそかに松花江を遡って三姓附近に来住していた。

（注10）分類は筆者による。

（注11）「烏蘇里地方と接壌する満洲境界の貿易は著大ならず。該境界は其延長一千余露里を有すと雖ども，然れども両国人の境界を通過するは，唯僅かに七箇処に於て許可せらるるに過ぎず，即ち烏蘇里江に於ては『カザケーウイチ』,『コヂローウスカヤ』,『グラーフスカヤ』の各哈薩克兵村，陸上の境界線に於ては『トウリーローガ』村（『プラートノ，アレクサンドローウスカヤ』の哨所ある所），『ポルターウスカヤ』，上『マングガイスカヤ』及『フンチンスカヤ』の各哨所に過ず，而して境界を通過する物貨を登録するは，唯一千八百九十年より開始したる後者の三哨所に過ぎず，而して就中最も大なる勢力を有するは寧古塔，三岔口より露領『ニコリスク』浦塩斯徳に通ずる『ポルターウスカヤ』哨所にして，『フンチンスカヤ』の哨所は琿春より海湾に至る要衝なり」［露国大蔵省 1906，569-570］。

（注12）先に引用の三姓と巴彦蘇蘇の資料を参照［陸軍参謀本部 1889，296-297及び303］。

（注13）「竊查厄木和羅係属四通八達之路，近日由西趕来牛条絡繹不絶，或三十，五十数条不等，甚至有百十余条一群者，日勝一日，東行滔滔不断，盤其詰往，均称趕赴海参崴売給俄夷宰食等語。」「吉林将軍衙門為厳禁将耕牛売予俄人的札文」光緒二年（1876年）五月初四日［吉林師範学院古籍研究所 1995，5］。

（注14）「吉林将軍衙門為俄人進城購買貨物按新章辦理的札文」同治元年（1862年）七月二十一日［吉林師

範学院古籍研究所 1995，3]，「寧古塔副都統為照新章攬阻俄人購買米糧牲畜的札文」光緒四年（1878年）六月初五日［吉林師範学院古籍研究所 1995，6]。

（注15）［ЦСКМВД（ロシア帝国内務省中央統計委員会）1899，巻72･76，表22]。72巻がアムール州，76巻が沿海州にあてられている。またサヴェリエフ（2005）はこの状況を詳細に論じている。

（注16）「案查喀属近年以来糧石雖覚収成，奈疊次出荒招集，人煙輳集，按年需粟，将敷本地用度。今聞外来喀商，任意増価購買小米等糧，私行装載拉運別城出售。車戸人等希図漁利，竟有往送。若任其紛紛運往興販，無所底止，及致本地糧米缺乏，一郡必受大累。実与地方大有窒碍，応即厳行禁止。」「阿勒楚喀副都統衙門右司為厳禁各属人等出售販運米糧事告示呈稿」光緒二年（1876年）二月初一日，他にも「阿勒楚喀副都統衙門右司為札飭拉林協領等出示暁論属下禁止食糧販運出省事呈稿」光緒二十二年（1896年）十二月十五日［東北師範大学明清史研究所1994，93，324］がある。

（注17）「茲届本年春季，例祭壇廟之際，毎遇祭期，看験牛条，率皆疲瘦不堪，而犄角中式者絶少。查其原因，委蓋由外来商客，以及本地回民違禁漁利，興販外境之所致也。且查前奉明文禁止耕牛出境，勿得貪図昂価，販售俄夷，致遭残害。等諭。」「阿勒楚喀副都統衙門右司為出示暁諭厳禁私販牛出境事呈稿」光緒二十年（1894年）二月初五日［東北師範大学明清史研究所 1994，251]。また註13と14の資料は東部国境の琿春での家畜売買の禁止に言及する。ここでも根底には過剰輸出に起因する耕牛不足があったと考えられる。

（注18）「查本処与俄夷占拠之摩闊崴相距咫尺，是以厳飭珠倫，仏多石，岩杵河，棘心河各卡官辦，不時盤察。不意本処流民不領票照，私往摩闊崴交易，尤有偸竊牛条潜往貨換，現経民人尹発，額噜特人常奇爾倫竊牛条已経被獲，其未拿獲者尚復不少。」「吉林将軍衙門為与俄国通商領票的札文」同治元年（1862年）四月初七日［吉林師範学院古籍研究所 1995，2]。

文献リスト

＜日本語文献＞

足立啓二 1978.「大豆粕流通と清代の商業的農業」『東洋史研究』37（3）.

荒武達朗 1998.「清末民国期山東省における農家経営と労働力移動」『名古屋大学東洋史研究報告』22.

――― 1999.「清代乾隆年間における山東省登州府・東北地方間の人の移動と血縁組織」『史学雑誌』108（2）.

――― 2005.「清朝中期以降中国人満洲移民出身地の分布」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』12.

石田興平 1964.『満洲における植民地経済の史的展開』ミネルヴァ書房.

井上紘一 1991.「パラディウスの南ウスリー踏査記――翻訳と解説――」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会.

石田精一 1942.『北満に於ける雇農の研究』満鉄調査部　博文館.

入江久夫 1937.『満洲漢人植民地域』満鉄産業部.

小瀬一 1989.「19世紀末中国開港場間流通の構造――営口を中心として――」『社会経済史学』54（5）.

関東都督府陸軍経理部 1911.『満洲誌草稿』出版地不明（復刻版：クレス出版，2000年）.

小峰和夫 1991.『満洲――起源・植民・覇権――』御茶の水書房.

佐々木史郎 1996.『北方から来た交易民――絹と毛皮とサンタン人――』日本放送文化協会.

サヴェリエフ，イゴリ･R. 2005.『移民と国家――極東ロシアにおける中国人，朝鮮人，日本人移民――』御茶の水書房.

孫蓉図・徐希廉 1931.『瑷琿県志』出版地不明.

田中秀作 1930.『満洲地誌研究』古今書院.

松浦茂 1987.「清朝辺民制度の成立」『史林』70（4）.

満洲国実業部臨時産業調査局調査部第一科 1936.『農村実態調査一般調査報告書　康徳三年度』満洲国実業部.

満鉄経済調査会第二部 1933.「満洲に於ける既耕地及未耕地分布状況」『満鉄調査月報』13（7）.

満鉄庶務部調査課 1929.『極東露領に於ける黄色人種問題』露亜経済調査叢書　大阪毎日新聞社（原著：Граве В. В. 1912. ***Китайцы, Корейцы и Японцы в Приамурье***. Труды Командированной по Высочайшему Повелению Амурской Экспедиции, 11.

СПб.）
守田利遠 1906.『満洲地誌』丸善.
安冨歩 2002.「定期市と県城経済――1930年前後における満洲農村市場の特徴――」『アジア経済』43（10）.
山田久太郎 1926.『満蒙都邑全誌（上下合訂本）』日刊支那事情社.
山本進 2002.「清代山東の棉業と華北沿海部の食糧政策」『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会（原載：同1991.「清代嘉道期の海運政策――漕運の民間委託化――」『東洋学報』72（3）・（4））
吉田金一 1963.「ロシアと清の貿易について」『東洋学報』45（4）.
陸軍参謀本部 1889.「満洲（盛京省，吉林省，黒龍江省）」『支那地誌（第15）』陸軍参謀本部（復刻版『満洲地誌』国書刊行会，1976年）.
露国大蔵省 1906.『満洲通志』東亜同文会（原著：Д. Позднеев 1897. ***Описание Маньчжурии***. СПб.［D.ポズネーエフ『満洲についての記述』サンクトペテルブルグ）.
若林敬子研究室 2005.『中国人口統計基本資料集』DTP出版.

＜中国語文献＞
東北師範大学明清史研究所・中国第一歴史档案館 1994.『清代東北阿城漢文档案選編』中華書局.
黒龍江省公路交通史志編輯室 1988.『黒龍江古代道路交通史』人民交通出版社.
吉林師範学院古籍研究所 1995.『渉外経済貿易』 長白叢書　下巻　清代民国吉林档案史料選編　吉林文史出版社.
孔経緯 1994.『新編中国東北地区経済史』吉林教育出版社.
雷慧児 1981『東北的豆貨貿易』国立台湾師範大学歴史研究所.
遼寧省档案館 1995.『清代三姓副都統衙門満漢文档案選編』遼寧古籍出版社.
林士鉉 2001.『清季東北移民実辺政策之研究』政治大学史学叢書　国立政治大学歴史学系.
熊知白 1933.『東北県治紀要』北京　立達書局.
楊余練 1991.『清代東北史』遼寧教育出版社.
衣保中 1993.『中国東北農業史』長白叢書　吉林文史出版社.
営口港史編委会 1995.『営口港史』人民交通出版社.
趙文林・謝淑君 1988.『中国人口史』人民出版社.
張鳳鳴 2003.『中国東北与俄国（蘇聯）経済関係史』中国社会科学出版社.

＜英語文献＞
Alexander Eckstein et al. 1974. “The Economic Development of Manchuria: The Rise of Frontier Economy.” *The Journal of Economic History* 34 (1).
Chen Nai-Ruenn（陳 迺 潤）1970. “Labor Absorption in a Newly Settled Agricultural Region: The Case of Manchuria.” *Economic Essays*（国立台湾大学経済学研究所経済論文叢刊）1.

＜ロシア語文献＞
ЦСКМВД（Центральный Статистический Комитет Министерства Внутренних Дел）1899. ***Первая Всеобщая Перепись Населения Российской Империи***, 1897 г.. СПб.（ロシア帝国内務省中央統計委員会 1899.『1897年第１回ロシア帝国国勢調査』サンクトペテルブルグ）.

（徳島大学総合科学部助教授，2004年11月８日受付，2005年２月８日レフェリーの審査を経て掲載決定）